

---

# セフィロトシステム

江咲 とまと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セフィロトシステム

### 【Nコード】

N1959BA

### 【作者名】

江咲 とまと

### 【あらすじ】

どこか一本ネジのぶっ飛んだお気楽冒険者六人の、世界をまるっと変えちゃうかも知れない大冒険！  
能天気な、時にシリアスに??さくつと読めるお手軽小説目指します。

ロストウツズと呼ばれる、広大無辺の大樹海がその世界には存在した。

測量技術は正確な世界地図の作成を可能とするまでに発達しており、数力国に囲まれ中立地帯として大陸中央に緑の奈落を形作るロストウツズの面積は既に解明されていた。

にもかかわらず、その樹海は広大無辺だった。還らなかつたのだ。

その中心に何かがあるのか、緑の奈落の底に何かがあるのか見た者か見に行つた者の誰一人として、還つてこなかつたのだ。

人間はもとより、魔族も、神族でさえも、還つてはこなかつた。

ある者は、不思議な力に護られた、金銀財宝を隠す巨大な遺跡があるのだと言う。

またある者は、異界へと通じるゲートがあるのだと言う。

何かがあるのか誰も知らないから、誰もが樹海の中心には何かがあると信じていた。

誰も目にした事の無い「何か」は、人間、魔族、神族の三人種から、全世界の人類から恐れられた。

皆一様に口を揃えて、行つてはならない、樹海の奥深くに踏み込んではないと警告する。

それでも、一部の人間だけはロストウツズへと探索に出かけた。

そこが緑の大樹海だからだ。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

宿酒場「やすらぎ」。

樹海近くの街に居を構えるこの宿酒場は、これから緑の魔境へと挑む冒険者達で溢れかえっていた。

真昼間だというのに、ビアのジョッキを手にした冒険者達が陽気な声で自らの武勇伝を、聞かれてもいないのにがなり立てる。

隆々と筋肉を盛り上がりさせた戦士が、金貨を賭けた腕相撲での力比べで、己の強さをアピールする。

皆、少しでも強いヤツと　生きて還る為、生存率を上げる為、腕つこきの冒険者を、仲間にと探しているのだ。

既に仲間集めを終えた集団は、もっと落ち着いて話のできる、静かなカフェか階上の宿泊部屋へと、足並みを揃え後にする。

仲間集めは簡単だ。強ければ。

オーラを纏う神族であれば魔物はその姿を見ただけで恐怖心を抱き逃走する。

この宿酒場に神族がいれば、その者は集う冒険者の中から最も強い者を仲間にと集める事ができるだろう。

しかし、神族はいない。

彼等は険しい山岳に住み、他種族との関わりを絶った生活をしているからだ。

そして彼らがロストウツズに踏み込めば、彼等は精神に異常をきたし、最悪の場合は狂ってしまうからだ。

角と尻尾を持つ魔族であれば魔物は彼らに従属する。

しかし魔族もまた、この宿酒場にはいない。

魔族は人間とは敵対関係にあり、彼らがもしこの場に居れば、人間は彼らに向けて躊躇い無く剣を振うからだ。

また、彼らはロストウツズに踏み込むと、魔物と同調し、最悪の場合は自我を失い魔物と化してしまうからだ。

例外は、ある。

神族にも魔族にも、極々まれに　ロストウツズの魔の手を逃れ、精神に異常をきたす事もなく、魔物と同調もしない者がいるには、いる。

しかしそういった者は例外なく、引き寄せられるように緑の奈落の中心へと消えてゆく。逃れられない。還ってこられない。

人間に比べ圧倒的に数が少なく出生率も低い彼らが、貴重な仲間をそんな危険な場所へとわざわざ送りだす筈は無い。

だからこの宿酒場には、神族や魔族のような力を持たず、ロストウツズに足を踏み入れても、精神に異常をきたさず魔物と同調する事もない、人間のみが溢れている。

どれだけ強かろうと、人間であればその強さなどたかが知れている。

魔物だらけのロストウツズへと挑むには、少しでも強いヤツと、徒党を組む必要があるのだ。

魔物は緑の多い地域、植物の豊かな土地に多く出現する。

世界に名を轟かせる大樹海、ロストウツズとなれば嫌というくらい、バラエティに富んだ様々な魔物にお目に掛れる。

作物の安定供給さえ確保できれば、本来なら危険を冒してまでロストウツズに出向く必要は無い。

成長が早く、種や苗の入手が容易な幾種類かの穀物や野菜は、畑を守る守護兵を配備し魔物を屠る事で一定の収穫を得てはいる。

しかし成長の遅い作物や、実を付けるまでに時間のかかる果物類は、収穫するまでに魔物に荒らされ、需要に供給が追いつかない。

厳重な警護をしけば栽培は可能だ。しかし経費に見合う収入を得るのは難しい。収穫までには魔物だけではなく天候も敵となる。収穫高が予定よりも少なければ高値を付けざるを得なくなる。買ってくれる者を見つけるのも難しくなる。王侯貴族がいつでも買ってく

れるとは限らないのだ。それに王侯貴族であれば、兵士に護られた、贅沢に硝子を使用した温室や専用の農場を持っているのが普通だ。

王侯貴族でない者が栽培に時間の掛る作物や果物を得るには、植生の豊かな、魔物の多く出没する、森や山に採取に行く必要が出てくる。尽き無い需要が、そこにあるのだ。

そして魔物の出現率と植生の豊かさは比例する。

森や山に採取に赴く者は、魔物と戦う技術を持つ者でなければならぬ。

人郷離れた大自然のただ中へと赴く緑のハンター達は、自らを冒険者と称した。

> i 3 8 5 5 7 — 3 5 8 4 <

さて宿酒場「やすらぎ」。

一攫千金を求めて、或いは腕試しに、はたまた職を失い喰いつめて流れて来た様々な自称「冒険者」達が騒ぐ煉瓦造り三階建ての一階部分。

まだ日の高い事もあり、また節約の為でもあるのだろう、ランプの火を落とし窓を開け放ち、屋外からの自然採光だけに照らされた薄暗い食堂兼酒場のその隅っこ。

そこに黒い外套を纏って佇む一人の男が居た。

名前はレイク・ブラツカ、27歳。彼女いない歴27年。友達いない歴も27年。

身長188センチ、色白で黒髪黒目の超が付く美形。外套の下には斜め掛けにした剣帯に長剣を佩いている。綺麗な顔をしていても軟弱な体はしていない、実は着痩せするタイプ。元はさる騎士団の騎士だったりして、そこそこに強い。

しかしこの男、どうにも性格に難があった。

美形に似つかわしくない粗野で粗暴な性格をしているわけではない、ならば高飛車で嫌みな奴なのかというと、そうでもない。

真反対の性格が過ぎるのだ。

引っ込み思案で対人恐怖症気味、自虐志向有り、言葉少ない、というより滅多に喋らない。

興味を示してこの男に話しかけた者は、そのあまりのコミュニケーションの取れなさ加減に、すぐに離れていった。

一応この男、他の冒険者同様、樹海探索に赴く為の仲間探しに来ている、のだが。

昨日もこの同じ場所に日がな一日、佇んでいた。

佇んでいるだけだ。

自分から誰かに声を掛けることもなければ、話しかけて来る者に

自分をアピールする事も勿論、ない。

こんな男が果して仲間を得る事ができるだろうか？普通は無理だ。しかし何の因果か、この男に似合いの、普通でない者達がどういうわけだか、偶然なのか運命なのか 五人ほど、いた。

最初にこの黒い棒人形に寄り添ってきたのは、普通でない偶然と運命に導かれてしまった五人の内の二人、黒髪ポニーテール少年のクロウ・ラオロと瓶底眼鏡の女シーフ、フェイ・フェイトだ。

「あもう、仲間になって下さい。僕はクロウ・ラオロっていいいます。クロって呼んで下さい」

「私はフェイ・フェイトですわ。フェイトと呼んで下さい。宜しくおねがいしますわ」

「……………」

開口一番、仲間になってくれとのストレートすぎる申し出に、レイク・ブラツカは無言で応える。

何も言いたくない訳ではない、少しでも良い印象を持ってもらえるような、そんな言葉を彼は無表情の裏で必死に探していたのだ。しかし探しすぎて言葉が出て来ない。

普通なら何も反応しない事に腹を立てるか、呆れるかして、話しかけた者は離れていく。

しかしクロとフェイは違った。

「いやあ、なかなか仲間になってくれる人がいなくて。助かりました。僕とフェイさんだけじゃほら、ロストウツズって魔物だらけじゃないですかあ、怖いですし」

「そうですねえ、私達、弱いですものねえ。良かったですわー、背の高い人が仲間になってくれて」

「えー、フェイさん、酷いですよう。僕の背はまだこれから伸びますよう」

沈黙を是と取ったのか、いや違う。この二人、常にこんな感じな



のである。

他者に対する垣根や遠慮といったものが、無い。

返事を待たずに仲間認定して、何故か間にレイク・ブラツカを挟み、勝手に喋り続けている。打ち解け加減がハンパ無い。

そしてその会話の内容のズレ加減も凄まじい。

自分達が仲間を得づらいう程、弱いのだと言つてのけた。そして弱くともどんな事が出来るか、何が得意かといった情報を共に危険な場所へと赴く仲間にと望む相手に伝える事をせず、さらに仲間にと望む相手に求めたものは背の高さだとフェイが見当違いな発言をし、さらにさらに背が低い事にコンプレックスを持つクロが背の高さについての話題を続けるという離れ業。

「ああ、そうだ。お名前は何ていうんですかあ？」

まず最初にそれを聞くべきなのだが、名を訪ねたのは身長の話から背が伸びる食事の話題に移り、野菜が食べたい、魔物の不味い肉はもう飽きた食べたく無いとさらに話を展開させ暫く会話を続けた後だった。

普通なら、この二人を仲間にと望む者は、いないだろう。

しかしレイク・ブラツカは違った。

「……………レイ」

たっぷりと間を開けて、その間にまたお喋りを始めた二人の会話の切れ目を待つ事も無く。

やっと出来た仲間に喜び全開でレイは自分の名を口にした。

仲間が自分よりも弱ければ、それだけレイの負担が増えるのだが、そんな事よりも仲間が得られた事自体が嬉しいらしい。

しかし美形に似つかわしい、低く落ち着いた美しい声は表情というものが全くなく、レイが喜んでいるのだと理解できる者は、世界中探しても見つからないだろう。

< 4 8 5 3 | 8 5 5 8 3 3 i >

「え、レイ？ ああそうだった、お名前聞いたんでしたっけ僕。呼ぶのに楽な、短くて良いお名前ですねえ。宜しく願いますね」  
「そうですね、良いお名前ですわ。私よりも一文字短いですわ。宜しく願いますわ」

「フェイさん、僕もクロだから、短いですよ」

「あら、レイさんと同じですわ。クロも短くて呼ぶのに楽ですわね」  
「でしょう？」

短い名前は素晴らしいと、クロとフェイの二人の会話が弾む。  
馬鹿にしているのかと思って怒っても良い。しかしレイは名前を褒められ喜んで鼻を膨らませた。それでもレイは美形なのだから、こちらもある意味馬鹿にしているのかと思ってても良いくらいの始末に負えない美形だ。

そしてレイの名前はレイク・ブラッカだ。クロの名前はクロウ・ラオロでフェイの名前はフェイ・フェイトだ。

レイも、クロもフェイも、フルネームではない。

しかし誰も気にしない。

この気にしなさ加減が共通する者があと三人、普通でない偶然と運命に導かれてやって来た。

「よう、あんたすツげえ美形だな。仲間になんねえ？ 俺グレン・

ガルディアーノ。グレンって呼んでくれ、ヨロシク」

「俺はシャウトだ。宜しく頼む」

「リンでちゅ」

増えた。

普通でない者がこれで六人、普通でない偶然と運命に導かれたとは思ってもせずに、世界を変える冒険の為に集ってしまった。

役者は揃った。では、始めよう。

レイの意思を誰も確認せず、一行のリーダーはレイに決まった。実力の程はともかくとして、この一行、実にバランスのとれたメンバー構成となっている。

リーダーを務める、というか務められるのかは甚だ疑問だが、兎に角レイは元、騎士であり攻守の要には相応しい。

クロは身軽で素早く、切れ味の良いカタナを得物とする、辺境ではサムライと呼ばれる攻撃に長けた戦士だ。

フェイは短弓とナイフを得物とする、後方からの援護射撃や不意打ちの出来るシーフだ。樹海の中では必要が無いだろうが、畏解除や鍵開けの技術も持っている。

グレンは回復魔法を得意とするプリースト。宗派は明かさなかったが、勿論誰も気にしない。得物は細剣。

シャウトは吟遊詩人……と言ふ事なのだが、身長2メートルを越す蛮族でどこからどう見ても近接戦闘を得意とする闘士だ。護身用と称して頑丈なメリケンサックも持っている。その野太い声を聞けば期待はあまり出来そうもないが、吟遊詩人であれば歌声に魔法効果を込める事も出来るだろう。とはいえ楽器を持っていないのだから、本当に期待はできないが。

最後に、でちゅまちゅ語を自在に操るリン。

フルネームはリン・ブランク。少女である。

可愛い幼女で、魔法使いである。

実にバランスが良い一行であった。

一行はグレン、シャウト、リンの三人が宿泊する部屋に場所を移し、ちよいちよい話を脱線させながらも今後の日程と装備の確認、買い出しの分担を決めて行動に移した。

買い出し費用は、全員で金を出しあって捻出した。揃いもそろってあと二、三日くらいの宿代しか持ち合わせていなかったの、ギリギリだ。

ぐずぐずしていればすぐに文無し素寒貧。明日にでも出発しなければならぬ。

レイ、クロ、フェイの三人は武器を砥ぎに出し、その他必要と思われる装備、雑貨を買いに行く。

グレンとシャウトとリンは、保存食糧と薬の調達だ。一行の中で薬についての造詣が多少なりともあるのはグレンしかおらず、保存食糧、食材や調理についての造詣が一番深かったのは、実はシャウトだったからだ。ちなみにリンは常にシャウトの肩に乗っているで、シャウトとワンセットになっている。

リンを肩車して、シャウトは野太い声で鼻歌を歌う。ご機嫌だ。身長2メートルを超す蛮族の自称吟遊詩人は、見かけに全く似合わない、料理、裁縫、その他家事全般を趣味としていた。

シャウトは食糧のお買い物が出来るので、嬉しくて仕方が無いのだ。

「なあ、グレン。香辛料買ってもいいか？ 糸買ってもいいか？ 縫い針新調したら駄目か？」

「香辛料と糸は高くないやつなら買ってもいいぜ。縫い針は金に余裕があったらな」

「飴買ってー」

「それも金に余裕があったら買ってやるよ、リン」

「そっぴやレイとクロとフェイの好き嫌い聞くのを、忘れたな。あいつらは何が好きなんだ？」

「多分、不味い物が嫌いで、美味しい物が好きなんだと思うぜ」

「それもそっぴやだ。よし任せろ。安くて量があつて美味しい物を見つけてやるっ」

シャウトは自分の趣味に対して、全く根拠の無い絶対の自信を持っている。

グレンのいい加減な言葉にも、自信満々で頷いたのであった。

> i  
> 1  
> 3  
> 8  
> 5  
> 5  
> 9  
|  
> 3  
> 5  
> 8  
> 4  
<

「いよう、お早うさん。待たせちまったか」

朝日にキラッキラと金髪を輝かせ、それなりに整った顔を台無しにする軽薄な口調の青年が近づいてくれば、それはグレンだ。

「お早うございますう。丁度僕らも今来た所ですよ。あ、一番早かったのはレイさんです。僕とフェイさんが来た時には、レイさんも居たんですよ。早いですよねえ」

ポニーテールにした長い黒髪を揺らして、くるくるとよく変わる表情を童顔に浮かべ聞かれてもいない事までペラペラと喋る少年はクロだ。

「お早う。じゃあ、行くか」

「すぴー。すぴー」

まだ寝たままの、プラチナブロンドの髪をした可愛い幼女を肩に乗せた、男らしい精悍な顔つきの灰髪の大男はシャウト。

「お早うございます。では、出発ですわね」

栗毛の三つ編みに瓶底眼鏡の巨乳爆裂ボディの女性は、フェイ。

「……………」

無駄に美形な黒い木偶の坊はレイ。

一行は朝日の中、開け放たれたばかりの街の裏門から、ロストウツズへと延びる街道へと、その一步を踏み出した。

ロストウツズまでは、徒歩で一日。

見渡す限り岩と石と剥き出しの大地しかない荒野を、何が楽しいのか、賑やかに一行は進む。

シャウトは鼻歌を歌い、リンは心ゆくまで惰眠を貪り、クロは賑やかに喋りまくり。

グレンは、セクハラまがいの褒め言葉なんだかかんだかを、フェイやレイだけではなく全員に連発し。

フエイは何事にも動じないおっとりさで、その全てに頼珍漢な反応を返し。

レイは自動人形か何かのように、最後尾をただただ付いて歩く。

同じように、樹海探索に赴くのであろう冒険者の一行が、大回りに彼らを避けて先を越す。

彼らと関わり合いにならない方が、生存率が上がるからだ。

森林地帯に赴けば、誰でも金目の物、つまり植物を手に入れる事ができる。

だから良く考えもせず森や山や 樹海を目指す者は沢山いる。

しかし、植物を手に入れる為には、魔物と戦わなければならない。戦って勝利しなければならぬ。

タダより高い物はないのだ。

魔物は人間を見れば襲う。全力で殺しに掛って来る。

ピクニックやハイキングに出かける様な軽い気持ちで緑の中に入れば、死ぬだけだ。

「おい、ほら見てみるリン。 緑だ」

「はっば！ はっばでちゅ！」

太陽が空を茜色に染める頃、地平線をデコボコに形作る岩や石のその向こうに、緑のお宝を最初に見つけたのはシャウトとリンだ。

「え、どこどこ？ うわ見えねえ」

「私にもまだ、見えませんわー」

「えー、いいなあ。 見たいなあ。 シャウトさん、僕も肩車してもらえませんかあ？」

「じゃあ、レイ。 お前リンを抱っこしててくれ」

肩車を強請るク口は17歳である。

しかし肩車を強請る方も、それを快く承諾する方も、そんな事は気にしない。

「え、ずりい。 じゃ、俺も頼むわシャウト」



「それでは私もお願い致しますわ」

便乗する者はいても、突っ込む者はこの一行の中にはいない。

23歳のグレンと21歳のフェイが、我も我もと肩車をして欲しがる。

「じゃあ、順番な」

とてつもなくシユールな肩車大会が始まった。

「うっひゃあ、高い！ ああ、見えました。緑だあ」

「おお、あれか！ ホントだ、緑色してるぜ」

「駄目ですわ。私の視力では見えませんわ……でもあのあたりの雰囲気がそれっぽいですわ」

順々に肩車をし終わったシャウトが、最後にレイに言った言葉はこれだ。

「レイ、お前は肩車、いいのか？」

レイは無言でリンをグレンに預けると、シャウトへ手を延ばす。

身長220センチのシャウトが、身長188センチのレイを肩に乗せる。

もちろん、誰も気にしない。

「レイ、日が暮れた。晩飯の時間だ」

一日あれば樹海入口には辿りつく。しかし一行はさらにその手前  
辺りで日没を迎え歩みを止めた。

「……………」

シャウトの提案に、レイが無言で頷く。

結成したばかりのチームだ。最初の野営地を樹海の中で過ごすの  
は危険すぎる。

殊更にのろのろと歩いた訳では無かったのだが、休憩中にリンと  
おままごと遊びに興じたり、肩車大会ではしゃいだりして日が暮れ  
た。

街道を少し外れた、巨石がゴロゴロと転がっている場所に野営地  
を決め、野宿の準備に取り掛かる。

周囲はまだ荒れた大地が広がっているが、もう肩車をしてもらわ  
なくても地平線が緑に覆われているのが確認できる。

もしも、近くに雑草の一本でも生えていれば、雑草サイズの魔物  
が襲ってくるかもしれない。

腕試しには、ちょうどいい。

「草でも生えてねえかなあ。ちよっくら探しに行くか？」

燃烧鉱石で火の準備をしているシャウトにグレンが声を掛けた。

もう長い事、植物を口にしていない。雑草でもいい、葉っぱが食  
べたいのだ。

「ああ……行きたいが、俺は晩飯の支度の方がしたい。他の奴と行  
け」

葉っぱが手に入れば、葉っぱを使った料理が作れる。心揺れ動く  
シャウトだったが、手に入るかどうかわからない葉っぱよりも、背  
負い袋から取り出した魔物肉と、何より昨日買ったばかりの香辛料

を組み合わせて作る料理の魅力に抗えなかった。

それを聞いたクロが、カタナのお手入れを止めて立ち上がる。

「あ、じゃあ僕も一緒に行きます。フェイさんもお願いします」

「わかりましたわ」

「……………！」

クロは何故かフェイまで誘った。レイが慌ててフェイの袖を掴む。フェイは分厚い眼鏡を片時も外さない女性だ、肩車大会でも地平線の緑をただ一人、確認できなかった。相当に目が悪いのだろう。夜に足場の悪い場所を歩くのは危険だ。クロは配慮が足りない。そう思ったのだ。

「レイさん？」

「……………目が」

「はあ、目はついておりますわ」

「……………暗いと……………危ない」

「そうなんですの？ 私、暗い方が歩きやすくて安全なのですが」  
「言っている意味が分からない、とでも言う様に、フェイは首を傾げる。」

「へ？ お前何で暗い方が歩きやすくて安全なんだ？ 瓶底眼鏡掛けてるくせに」

尤もな疑問をグレンが口にする。我が意を得たりとレイが首を縦に振った。

「ああー、皆さんにはまだ言っただけですわねえ。フェイさん、眼鏡取って眼力光線見せてあげましょうよう、眼力光線」

「眼力はありませんし光線も出ないですわよ……………ええと、とりあえず眼鏡を外せばいいんですのね？」

クロに言われて、フェイがゆっくりと眼鏡をはずす。リンは石ころ遊びを止め、シャウトも晩飯の準備の手を休めて、その光景を興味津々で見詰める。

瓶底眼鏡のその下の素顔が、月明かりの下に現れる。

「……………！！！」

「うっわ、すげえ！」

「これはすごい」

「かああっこいいでちゅ！」

クロを除く全員が驚愕した。

眼鏡の下から現れたのは、それは見事な銀目。白目と殆ど区別付かないくらいなの。しかも淡く光っているようにも見える。

「すごいでしょう？ フェイさんには暗視能力があるんですよ」

クロが得意気に鼻を鳴らす。

「ええと、そんな大層なものではないんですわ。ただちょっと闇の中の方が、視力が良いだけですの」

「いや、それ立派に暗視能力だってば。すげえな、お前。かけえ！」

「初めて見たぞ、そんな瞳。珍しいな」

「ぴかぴかしてるでちゅ」

やんややんやとフェイを持って囃す仲間達を見て、レイが小さく吐息を零す。

「レイさん？」

躊躇いがちにレイを見るフェイの頬に、レイがそつと手を延ばす。

「……………その……………良い目だな」

恐ろしく綺麗なレイの顔に、うっすらと微笑が浮かぶ。

「……………優しいんですね。貴方も、皆さんも」

瞳に淡い燐光を宿しながら、フェイが微笑んで、小さく呟く。

とても小さな声だったから、その呟きを聞いたのは、レイただ一人だけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1959ba/>

---

セフィロトシステム

2012年1月9日00時50分発行